

戯曲セミナーってどんなところ？

演劇に必要な出会いを見つけに

土田 長田さんはセミナーを受講してから9年で日本を代表する劇作家のひとりになりましたよね。**長田** ありがとうございます。がんばります。**土田** セミナーに通う前から劇作はしていたんですか？

長田 ミュージカルを書いていました。大学でミュージカルサークルに入って、そのまま10年くらいずっとミュージカルの仕事をしてたんです。そこを離れて次のところに行きたい、現代演劇の芝居を書きたいと思ったんですけど、でも人脈も全くなくてどうやって始めたらいいいのかもわからなくて。戯曲セミナーに行けば、現代演劇をこれから始める人たち60人くらいに一度に会えると思っただんです。

土田 南出くんは戯曲セミナーに来る前、相当長いあいだ演劇をやってたんですよね。

南出 大阪で10年くらい劇団をやってました。東京でも演劇やりたいなと思っただけで、芝居をどっかに行きたいって思っただけで、でも人脈も全くなくてどうやって始めたらいのかもわからなくて。戯曲セミナーに行けば、現代演劇をこれから始める人たち60人くらいに一度に会えると思っただんです。

ロジカルな方法にも劇作家の人間性にも触れられる

長田 いま第一線で活躍されている劇作家のお話



長田育恵 てがみ座主宰・NOTE Inc.所属
1977年生まれ。東京都出身。2007年に「戯曲セミナー」を受講。翌年に同研修課で井上ひさし氏に師事。2009年に「てがみ座」を旗揚げし、全公演の戯曲を手がける。2015年「地を渡る舟」(再演)で第70回文化庁芸術祭演劇部門新人賞受賞、16年「壺柑とユウウツ〜茨木のり子異聞〜」で第19回鶴屋南北戯曲賞受賞。16年度文化庁東アジア文化交流使に就任、韓国に派遣。近年は外部公演の脚本も多く手がけ、16年『SOETSU〜韓くにの白き太陽〜』で第61回岸田國士戯曲賞にノミネートされる。

を、直接聞けるっていいことも受講の理由でした。1年を通じて皆さんの劇作家にお会いできるから、いままの現代演劇を支えているのはこういう方たちなんだって、本当によくわかりますよね。**土田** 年間で約30コマの講義。とんとん違う講師が来て話す。どうでした？

長田 講師の方がそれぞれのやり方を正直に話してくださる。いろんな方法があることがよくわかりました。

南出 ほくのときは、平田オリザさんの講義が5回、長谷基弘さんが3回ありました。このおふたりって、ここまでロジカルに戯曲を分析している人がこの世にいるのかって思うくらい、完全に分解したものをきくと体系立ててますよね。あの話を聞けば、全く書いたことのない人でもイロハからわかると思っ。

長田 土田さんの授業も面白かったです。5行とか10行のなかで、登場人物ふたりの関係性や状況をわからせるっていい。劇作家はこうやって、シチュエーションと絡ませながら、必要な情報をコンパクトにしてるんだなって。ひとつの台詞にひとつの効果だと効率が悪くて、ひとつの台詞に2つなり3つなりの効果を入れて構築していることがよくわかりました。

土田 一番いいのは、たとえば「白い水筒だね」って言うだけで、「あ、ふたりは長い間つきあってたけど

今日別れたんだって観る人にわかることだと思っただけで、なかなかそうはいかない。

長田 人間は実際の暮らしのなかでは、みんなそういうやりとりをしてるんですよ。それを意図的に書くことがわかって、すごく印象深かった。

土田 南出くんの印象に残っていることは？

南出 平田さんの授業で、「うまく書く方法は教えられません」って宣言されて、「でも失敗しない方法やっちゃいけないことだけは教えられる」と。これは絶対やってはいけない、こっちは来ちゃだめだって押さえておけば、あとは自由にどこまででも行ける。ほくは平田さんの本を読んでいたの、見たことあるフレーズだったんですけど、改めて本人から教わるのは大きい。

困ったときに帰れるところ

土田 戯曲セミナーで得たことは、いまの劇作に活かされていますか？

長田 いろいろなかから伺った様々なやり方が、ストックになっています。ある先生からは、単語帳にエピソードをいろいろ書いてそれを並べ替えながら話をつくと伺ったんですね。自分でも話に詰まったときはそうしてみたり。井上ひさし先生が詳細な年表をつくられているのを見て、自分もあのくらい詳しい年表をつくらうって思うようになったり。

南出 ほくはプロットを書く習慣がなかったんですけど、講師の先生にも書く派と書かない派がいたんですけど書く人のほうが多くて、書かない派の人も、

自分なりの書き出す前の方法っていろいろの、そういうのを持って人が多かった。で、台詞を書き始めるのをあえて我慢してプロットの段階でわくわくするくらいまで追い詰めるぞと。そっやって書いたのが去年(2017年)の劇作家協会新人戯曲賞の最終候補になった『ずぶ濡れのハト』です。

長田 台詞を書くのは最終行程だったという認識を、戯曲セミナーで初めて持ちました。

南出 講師の体験談を生々しく聞けたこともとてもよかった。自分のなかに、困ったときに帰れるところがあった気がするんですよ。

土田 さっき話していた、同じ志を持った人との出会いという点はどうですか？ 人間的な結びつき、できた？

南出 できました。ほくは二十代の終わりから演劇を始めたから、大学のサークルでやってきた人たちとのつながりがずっと羨ましかったんですよ。遠慮なしに相談したり頼んだりできる関係っていいか。いまではセミナー同期が、大学サークルの同期みたいになってます。

長田 会場が座・高円寺のけいご場で、その雰囲気もよかったですよね。

土田 いろんな人がいますよね。

長田 年齢も10代から70代まで。

南出 セミナーに来た動機も様々ですよ。ほくみたいにガツガツ勉強したいっていうのは半分くらいで、あとは自己啓発に来たとか、会社の仕事の役に立つからとか、そういう人もいらっやって。



南出謙吾 劇団らまのだ座付作家
1974年生まれ。石川県出身。1999年より大阪に移住して「劇団りゃんめんにゅーろん」を主宰。2008年に伊丹想流子塾に入塾し、マスターコースにも参加。転勤により東京に移り、2014年に「戯曲セミナー」を受講。翌年より研修課で坂手洋二氏に師事。2015年に「劇団らまのだ」旗揚げ。同年、『終わってないし』で第2回北海道戯曲賞優秀賞受賞、『ずぶ濡れのハト』で第21回劇作家協会新人戯曲賞最終候補。2016年に「触れただけ」で第22回劇作家協会新人戯曲賞受賞。

土田 講師と受講生も、友だちになったりライバルになったりするよね。ほく、セミナーで知り合っただけで付き合いが続いている人が何人かいる。

南出 講師と生徒の距離が近いなと思います。講義のあとに毎回交流会があって、講師の先生もけっこう参加してくれる。生徒と先生というよりは、劇作家同士に近いような…。

勉強したい人も楽しみたい人も

土田 おふたりはセミナーを受講する前に劇作の経験があった。でも全然書いたことのない人はどうなのかな。



土田英生 MONO代表・(株)キューブ所属
1967年生まれ。愛知県出身。1989年に「B級プラクティス」(現「MONO」)結成。1999年『その鉄塔に男たちはいる』で第6回OMS戯曲賞大賞を受賞。2001年文学座に書きおろした『崩れた石垣、のぼる鮭たち』で第56回芸術祭賞優秀賞を受賞。2003年文化庁の新進芸術家留学制度で一年間ロンドンに留学。劇作と並行して映像脚本の執筆も多数。日本劇作家協会代議員、運営委員。戯曲セミナーの講師、新人戯曲賞の審査員も務める。

南出 大丈夫だと思えますね。書いたことのない人でも、書き始めることができたりするでしょうし。自分で歩く気があればとんとん歩けるし。

長田 すごくオープンな感じですよ。掘ったら掘っただけ出てくるってことだよ。通じているんなら劇作家に会えるってことだから。

南出 各講師が自分の十八番を出してくるじゃないですか。平田さんと長谷さんが俯瞰したことを教えてくれて、それ以外の方は台詞とか構成とか、一番得意なものを披露してくれる。それはこの講座の面白いところだと思えますね。

セミナーが「その先」につながる

長田 受講して9年経って覚えているのは、課題で自分が何を書いたかっていうことじゃないんですよ。まずは劇作家という生き様に触れたことが、一番よかったんじゃないかなと今は思っています。

土田 長田さんは昨年、講師もやっていますよね。はい。昨年今も後半のクラスを担当したので、書いたものをどうやって上演すればいいですかっていう質問がありました。この先に一歩進むためにはどうしたらいいんですか？

土田 まさにいいモデルだもんね。戯曲セミナーからプロの劇作家になった人だから。

長田 セミナーで最後に戯曲1本を提出すれば先生の講評を受けますよね。私は講評を伺って書き直してそれを「てがみ座」の旗揚げ公演にしました。

南出 あ、らまのだの旗揚げ公演もそうです。さっき話した『ずぶ濡れのハト』(上演時には『青いプロペラ』と改題)。

土田 じゃあふたりともうまく移行してるんだね。私の講義では、旗揚げ公演でどうやって劇場の予約を取りに行くと、大体どれくらいお金がかかったかも話しますよ。

土田 セミナーからその先に、どうやってつないでいくのかだよ。セミナー自体もなにかきっかけになった？

南出 ほくは同期のなかに、演出を任せられる人を

見つけました。

土田 彼女も賞を取ったんだよ。

南出 若手演出家コンクール(2016)で優秀賞を。

長田 すごくいい出会い…！

南出 やっぱ同期だから演出に不満だったら不満って言えるし。

土田 おんなじ地点から始めたからだね。

ここに来れば、なにかと必ず出会えます

土田 これから受講を考えている人に対して、なにか伝えることはありますか？

長田 戯曲セミナーは出会いの場です。来ないと出会えない。来さえすれば、なにかとは必ず出会える。

南出 何十人もいれば、自分にとっておもしろい人が誰かいます。誰かはいる(笑)。

長田 いまですよ。そして現代演劇に興味がある人が集まるから、お互いに自由に話せる土壌もある。土田 方法を知ることによって、自分の才能の方向に気づいてもいい。長田さんと南出くんみたいに、劇作家として活躍できるきっかけにもなるかもしれない。

南出 セミナーに来る動機は、劇作家になりたいっていうことじゃなくても別にいいかなと思っんですけど、なんでもいい。演劇を楽しみたいとかでもいい。ただその動機が強いほうがいいだろうと思っすね。強い動機をもって、それを自分で叶える場所だろうなって。

*座長のロングインタビューを劇作家協会のサイトに掲載しています。ぜひご覧ください。

講師からのメッセージ

平田オリザ

毎年、私の担当する講座では、集団で戯曲を創る作業を通じて、戯曲の持つ基本的な構造を理解してもらうことを心がけています。うまい戯曲を書く方法は教えられませんが、失敗しない戯曲の書き方が少しでも伝えられればと思っています。

集団で戯曲を書くというと、奇異に感じるかもしれませんが、この作業を通じて、いかに自分の持っているイメージを他者に伝えるのが難しいかを身をもって体験してもらうのも、授業の狙いの一つです。

二ヶ月ほどの時間をかけての集団作業にりますので、途中は混乱や紆余曲折もありますが、終了後は皆さん、強い満足感を持ってもらっていると思います。

中屋敷法仁

「戯曲セミナー」は様々な“出会い”に満ちた場です。まずは魅力的な講師たちとの出会い。どなたも現代演劇の劇作家、しかも現役で活動されている方ばかりです。戯曲創作のノウハウはもちろん、演劇現場の生の体験談などに触れる事ができます。

そして、ともに戯曲を学ぶ仲間たちとの出会い。戯曲セミナーには、さまざまな分野から受講生が集まってきます。他の受講生からも多くの刺激を受けることでしょう。

そして、新しい自分との出会い。戯曲セミナーでの学びを通じ、これまでの自分にはなかった新たな感性が磨かれると思います。そんな「戯曲セミナー」を通じての皆様との出会い、私も心から楽しみにしております。

渡辺えり

言いたいことがなかなか言えないもどかしい時代になってきました。

思いついたこと、書きたいことをノートや頭の中にメモしておいて、机の前で吐き出してみる。整理するのは後でも大丈夫。

劇作は芝居をつくる様々な人間の協力によって、自分という個人だけではなしえぬ力を発揮することができます。その面白さをセミナーで実感してください。